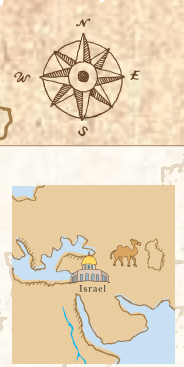
紅花の原産地と伝来



［紅花はどこから来た］

紅花が利用されるようになったのは、約4,500年ほど前から。紅花の野生種は中近東、中央アジア、アフリカに広く自生していますが、現在栽培されている品種の祖先は、イスラエルを中心に自生している「カルタムス・パレスチヌス」という種類だということが近年のDNAの解析結果から解明されています。紅花の起源地は中近東だというのが有力な説です。

Russia
ロシア

China
中国

Japan
日本

Israel
イスラエル

India
インド

［日本へ伝来］

3世紀の纒向（まきむく）遺跡（奈良県）から紅花の花粉が大量に発見されており、この頃には、日本に紅花が伝来していたと考えられています。また、6世紀後半の藤ノ木古墳（奈良県）の石棺内からも花粉が見つかっており、儀式に使われていたと考えられています。

［山形の地で大きく花開く］

山形には室町時代末期頃に伝わったといわれています。全国各地には、その頃に紅花が栽培されていたという記録があります。中でも山形は、紅花の栽培に適した気候、風土だったため栽培がとても盛んに行われるようになりました。

［紅花はシルクロードを通って］

紅花はシルクロードを通って中国に伝わり、朝鮮半島経由で日本へ持ち込まれたとされています。この時、同時に染色技術も日本に入ってきたと考えられています。

どこで生まれ、なぜ日本に？
世界を旅した紅花の浪漫を探る。

栄華をいまに伝える紅花屏風

①左半双の図

第３景　第２景　第１景

●紅花屏風:㊟長谷川コレクション・山寺芭蕉記念館 所蔵

山寺芭蕉記念館（山形市）所蔵の六曲一双の屏風。紅花の生産から出荷、北前船での輸送、京都の紅花問屋の様子が描かれています。描いたのは、絵師青山永耕※。のちに狩野永耕応信と改名。

※青山永耕:出羽村山郡太田村（現東根市）出身1817（文化14年）～1879（明治12年）没

紅花問屋での作業と輸送の様子

［①左半双 第1景］
紅花問屋で行われている荷造りの景。問屋の主人が庭先に出張って采配する中、荷造りや屋号の書き入れ、荷運びなどの作業が黙々と進められている。

［①左半双 第3景］
敦賀を経て京に運ばれた紅花の荷。描かれているのは、京都の紅花問屋美濃屋と推定され、2階座敷の景は、荷主と商談している様子。

［①左半双 第2景］
海路搬送の場合、大石田で船積みされた紅花は、酒田で海船に積み替えられ、西廻り航路で敦賀の港まで運ばれた。

②右半双の図

第３景　第２景　第１景

紅花の生産と紅餅加工の様子

［②右半双 第1景］
豊作を祈る春祭りの景。農家の庭先でお祝いのもちつきが行われ、道端でたこあげをする子供の姿があり、桜が満開。いよいよ農作業が始まるところ。左端に問屋筋の商人と思わしき編笠姿の旅人が描かれている。

［②右半双 第2景］
大川を隔て、手前が耕うんと紅花の播種の景で、向こう岸が花つみの景。

［②右半双 第3景］
紅餅に作り上げられるまでの工程が、水洗い、花踏み、花寝せ、餅丸め、餅踏み、餅乾しの作業に区分して詳しく描かれている。

COLUMN

山形美術館（山形市）でも六曲一双の紅花屏風を所蔵

江戸時代に紅花商人として活躍した㊟長谷川家が収集したもので、絵師横山華山の作品。

山形と京の都を繋ぐ水の道

車や鉄道がない時代、大量の物資を運ぶには、川と海路による水上輸送=水の道が欠かせませんでした。江戸幕府が出羽の年貢米を大量に江戸や大坂（大阪）に届けるために整備されたのが、「西廻り航路※」です。これにより、山形と京都や大坂（大阪）が、水の道により深く結びつきました。北前船で紅餅を運び、帰りには京都で買い付けた品を持ち帰り、各地で広く商いを行なった紅花商人たちの活躍により、山形は紅花の一大産地となっていったのです。

〈北前船の復元船（2分の1サイズ）〉

〈北前船航路と連結する艀（ひらたぶね）船〉

紅と日本人

赤は生命を象徴する色として古くから呪術（じゅじゅつ）的、祭祀（さいし）的な意味合いを持っていました。人生の節目に行われる「初宮参り」「七五三」「婚礼」などの儀式では紅が使われ、健やかな成長を願いました。「還暦」の時に赤色の衣服を贈るのは、かつて魔除けの意味で産着に紅が使われていたことに由来し、「生まれた時に還る=新たな人生をスタートする」という意味が込められています。遠い昔から、赤、そして紅（真紅）は日本人の生活に根付いてきたのです。

初宮参り

七五三

婚礼

還暦
画像提供：伊勢半本店
撮影：外山亮一

紅花と山形

紅花を「県の花」に制定！

1982年（昭和57年）に紅花を「県の花」に制定し、「紅花の山形路」観光キャンペーンがスタート。1997年（平成9年）まで続くこのキャンペーンは、県内全域の観光名所、温泉、さくらんぼ、そばなど、山形の魅力を発信する大規模なものに。また、江戸時代の雛人形を見ることができる「やまがた雛のみち」は、今でも続く人気イベントです。

第47回国民体育大会「べにばな国体」開催！

画像提供：（株）山形新聞社

1992年（平成4年）に開催された「べにばな国体」の開催時期は秋。通常初夏に咲く紅花を秋に咲かせるため、種を播く時期をずらしたり、ハウス栽培を行うなど工夫を重ね、国体会場を紅花が彩りました。表彰式では紅花染めの振袖を身にまとった女性達がプレゼンターとして華を添えました。

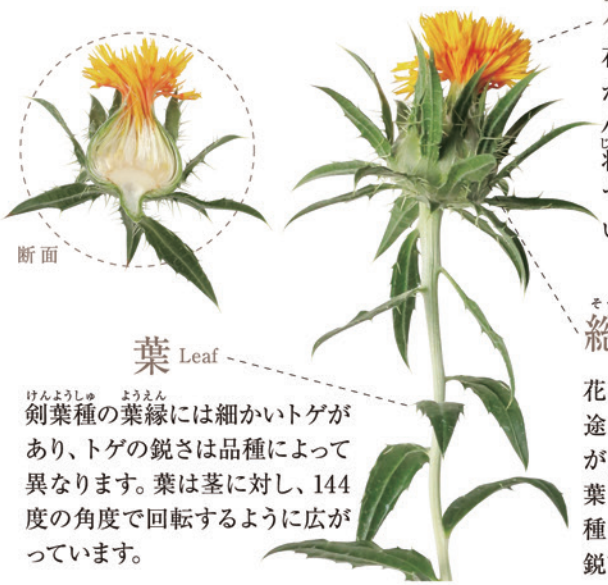
COLUMN

日本農業遺産※認定

平成31年2月、山形県紅花振興協議会が申請した「歴史と伝統がつなぐ山形の『最上紅花』～日本で唯一・世界でも稀（けう）有な紅花生産・染色用加工システムが、日本農業遺産に認定されました。

※日本農業遺産は、我が国において将来に受け継がれるべき伝統的な（農林水産業システム）を農林水産大臣が認定するもので、平成31年2月現在の認定地域は、全国で本県を含め15地域。

紅花の構造



花 Flower

花びらのように見える1本1本が「花」。紅花は、これらの小さな花が集まって咲く「頭状花」です。キク科の花（ヒマワリ、タンポポ、アザミ）はいずれも同じ構造です。

総包 Involucre

花を包み込む包葉は、生育の途中で花全体を保護する役目があります。これら複数の包葉のことを総包と言い、剣葉種の包葉は成長するにつれて鋭いトゲが出てきます。

葉 Leaf

剣葉種の葉縁には細かいトゲがあり、トゲの鋭さは品種によって異なります。葉は茎に対し、144度の角度で回転するように広がっています。

紅花の特徴

紅花はキク科の仲間です。山形では7月上旬～下旬に開花します。開花するためには「高温長日」が好条件。特に温度の影響は大きく、生育に適した温度の範囲では日照時間が長ければ長いほど生育が早まります。開花までの有効積算温度※は620℃前後です。

※有効積算温度：日平均気温から成長下限温度（10℃）を差し引いて加算したもの。

紅花の種類

もがみべにばな

県農業試験場で、出羽在来中生種の中から系統を分離させた「剣葉種」です。

とげなしべにばな

出羽在来種から選抜した、トゲのない「丸葉種」です。

しろべにばな

出羽在来種の突然変異から生まれ、花がクリームがかった白色の「剣葉種」です。

紅花栽培の流れ

01 種を播く

時期が遅れると草丈が低いうちに開花してしまうため、播種の適期は4月上旬～中旬。一つのうねに約20㎝間隔で2列に播き、1～2㎝程度の覆土をします。発芽までの目安は7～10日です。

02 間引きをする（2回）

本葉が2～3枚開いた頃（5月上旬頃）と6～7枚の頃に間引きをします。株間が10㎝程度の間隔になるように、葉が褐変しているものや生育不足のものを抜きます。

03 病気・虫対策と土寄せ

炭そ病やアブラムシなどの病虫害により被害を受けた茎葉は除去します。草丈が約30㎝と約60㎝の時に土寄せを行い、根張りを良くし、株の倒伏を防止します。

04 収穫（花摘み）

紅餅・すり花用は、花びらの下部が黄色から少し赤い色に変わった頃が収穫の適期です*1。乱花用は、花びらが黄色のうちに収穫します*2。

*1：朝霧のあるうちに摘み取ります。
*2：晴れた日の日中花びらが乾いた状態で摘み取ります。

【やってみよう】あなたの家の庭や畑で紅花を育ててみませんか？